

井上靖 『城砦』

坂口博

井上靖（一九〇七〜九一）の「城砦」は、毎日新聞に連載（六二・七・一一〜六三・六・三〇）のあと、毎日新聞社から刊行（六四・五）され、文庫版（角川書店、六六・一一）も出版された。刊行当時は話題作だったようで、六五年にNHK、六六年にフジテレビでTV連続ドラマにもなっている。主役は、それぞれ小林千登勢、岩下志麻という、昨今なら、松嶋菜々子や藤原紀香といったところ、役者に不足はない。

主人公は江上透子。「S大学の仏文科」卒業の二八歳。東京の「千冬産業」という会社の渉外課勤務となっている。住居は世田谷区等々力の小さな借家、まだ自宅に電話があるのも珍しい時代（江上家への電話も隣家を取り次ぐ）。同居の弟に音楽家（作曲家）をめざす涼一郎（二二歳）がいる。両親を故郷で亡くし、その後上京した姉弟の二人暮らし。姉が家計を支える。彼女に断わられても断わられても求愛を続ける、いささか軽薄なサラリーマン青年・藤代了介（二五、六歳）。婚約者がいながら彼女に魅かれていく三六歳の考古学者・高津恭一。この四人に、それぞれ関わりを持つ初老の男・桂正伸。「TR工業」社長を勇退し、悠々自適の釣り旅行三昧の生活を送る五十代終わり（執筆時の作者と

同じ）、妻には三年前に先立たれ独身。娘二人も結婚し、近くそれぞれに孫も産まれる。高級アパート（今なら高級マンションと表現される）に、老婆と若い女中（これもお手伝いさんか）二人を雇う生活ぶり。この五人が主要人物である。物語の進行役、つまり狂言廻しは桂がなう。そして、時代背景は執筆・連載と同時代になっている。いわゆる「現在進行形」の小説だ。

まさしく、メロドラマだ。それも擦れ違いならぬ、偶然の出会いが次々と連鎖していく物語が展開する。いくら新聞小説でも、余りに安易にすぎませんか？ などとつい半畳も入れたくなる。いずれにしても、作者の意図が見えすぎる。でも、この単純さは、まさにTV向きだった。場面も、伊豆や紅葉の東北・弘前、横浜港、北陸の日本海・金沢と全国各地を移動しながら舞台とする。結末頃には「未必の故意」殺人事件まで発生し、ヒロインは自殺の虞を残して失踪するなど、トラベル・ミステリーにサスペンスの要素も加わってくる。また、六四年一〇月の東海道新幹線開業の前であることにも留意しよう。

ところで、江上姉弟の出身地は長崎市諏訪町だ。しかし、長崎も原爆も「城砦」では半ばまで全く触れられない。いわば背後に伏線として隠され続けている。初版は全四二七頁、文庫版では約七〇〇頁の長篇にもかかわらず、まさしくちょうど半ばの八章（全十七章構成）の次の会話に「長崎」は初めて見える。

「姉さん、郷里へ帰ってみようか」／「長崎へ」

このあと、八章の回想と十章の久しぶりの帰郷が、実は「長崎」も「原爆」も、この作品ではすべてである。他で作者が詳しく二つの事柄に踏み込むことはない。

透子は「お茶の水のS病院の内科の診察室」を「この三四年、毎年一回」訪れている。

「今のところ何の異常も認められませんね。血液検査、レントゲンの透視、血沈、みんな特に注意しなければならぬようなものは出ておりません。……」若い医師は言つて、事務的に古いカルテをめくっていたが、その時医師は、ふと一か所に眼をとめると、極く微かだが、表情を変えた。

「長崎に居たんですか」

「おりました」

「どのくらい離れておりました」

「落ちたところから一キロです」

彼女の「被爆」は十歳、四歳だった弟とたまたま一緒に遭遇する。かいつまんでまとめても、かなり長くなる。

多勢の人間の運命を一瞬に変えた十八年前の、とある夏の一日のことを思い浮かべることができる。……その日、透子は涼一郎と二人で聖フランシスコ療養所へ、そこに入院していた母方の叔母の見舞に行っていた。その療養所は諏訪神社の傍にある透子の家からバスで三十分程のところにあつた。長崎は港に迫っている愛宕山、稲荷山、稲佐山といった幾つかの丘陵の麓に街が開けていた。聖フランシスコ療養所は稲佐山と稲荷山の二つの丘陵の間の、浦上川に沿った地帯の一番奥まったところにあつた。……もともとこの建物は初め長崎公教会の神学校として建つたものであつたが、昭和十七年にカトリック経営の結核療養所となつたものであつた。……入院患者は七十名程で、それが幾つかの大部屋と個室にはいつていた。患者は全部結核患

者だった。……透子は三階へ上つたところで、それまで握つていた涼一郎の手を離れた。……窓の前に立つた。この病院へ来る楽しみの一つは、……窓から外を覗くことであつた。透子はいつも廊下の窓からも、叔母の居る病室の窓からも外を覗いた。叔母の病室の窓からは港灣に近い街の一部が遠く見渡せた。……眼に映っているものは、丘も、そこを埋める木々も、遠くに点々と見える人家の茂りも、みな真夏の動かない空気の中で息を詰めていた。すべての物はじつとりと汗ばみ、息を詰め、微動だにしなければならぬ。森羅万象のことごとくが、異常な蒸し暑さの中に息絶えたような一瞬の静けさであつた。

その静けさの中で、透子は短い地軸の裂けるような炸裂音を聞いた。と同時に、建物の崩れるような烈しい音に包まれた。……いかなる理由に依つてか、一人の死者も重傷者も出さなかつた不思議な建物の中に自分たちが護られて居たことも知らなかつた。病院の者たちが避難したところは、病院の裏手の雑木林の中であつた。透子と涼一郎は、若い叔母に寄り添つて、昼とも夜ともつかぬ異様な暗さの中に立つていた。そして煙りの層が幾つか割れて、やがて、そこから眼の中にはいつて来たものは、誰もが信じようとして信ずることのできぬ恐ろしい情景であつた。透子は聖フランシスコ療養所の裏手の雑木林で黄と黒の入り混つた煙りの中から、初めぼんやりと、やがて次第にはつきりと、長崎の浦上川に沿つた街並み一帯が現れて来るのを見た十八年前の驚きを、どのように説明していいか判らない。きのうまで見慣れていた街とは全く別の一枚の地獄絵が煙りの中から現れて来たのであつた。街は見晴らす限りローラー

を掛けられたように、全部潰れていた。

井上靖は、一瞬にして「世界」の変貌を具体的に目撃した子供が生長して、それにどのように影響されるかを描きたくて、この「被爆」体験のなかでもきわめて特異な状況を設定したのだろうが、いささか無理がある。結核療養所へ幼い子供を見舞に、それも子供だけじゃなくて、いくら開明的で宗教的慈愛に溢れた「長崎」でも、想像できない。ましてや「透子の父親は医者であった」から、なおさら疑問だ。「透子の家のある地帯は爆心地ほどの甚だしい被害はなかった」が、「終戦の年の十一月、母を喪った」。心臓麻痺で「母が亡くなってから七年目に、父は癌で殞れた」。まさに一家して、「原爆」にかかわりなく滅びへ向かっている。

「透子は長崎で中学、高校、大学というコースをとった。大学は短期大学ではあったが、その名前は九州中に知られていて、女子大学としてはいわゆる名門であった。高台に建っている異国の匂いのする古い校舎、手の届きそうな程すぐそこに置かれてある港湾、校門の前の石だたみの急な坂道」。この大学を父親の死とともに中退し、長崎から逃げるように「小学生だった涼一郎と共に東京に移った」のち、「S大学」に入学する。「透子を長崎から去らしめたものは、……あの日の爆心地の情景であった。……どんなに幼くても、涼一郎もまたそうであるに違いなかった」。

実名は出されないにしても、長崎の「名門」は、一八七九年創立のプロテスタント系の「活水学院」がモデルとわかる。なお、長崎市小峰町に実在するカトリック系の「聖フランシスコ病院」の沿革は、「一九四三年、男子フランシスコ会によって、浦上第一病院を開設。一九四五年八月九日、原子爆弾によって壊滅。そ

の後二五床木造建病舎を再建し、療養所として再出発」となっている。「七五床の結核療養所」になるのは、四九年のことのようだ。小説のなかで、「結核療養所」としたのは、作品の進行している「現在」に引きずられている。むしろ、そうでない「病院」のままではよかった。

さて、問題はそんな瑣末なところではない。「いま彼女が立っている地盤は他の誰のそれとも違っている。彼女の肉体は、自分が立っている地盤がいつ崩壊するかも知れないという不安と予感を持っている。そして彼女の精神は、決して崩壊することのない、自分が信ずることができる地盤が、この世のどこかにありはしないかと、それを求めている」(十一章)。「被爆」が問題なのではない。一瞬にして「世界」が変貌する様相を「目撃」したことが、そしてそれを記憶し続けていることが問題なのだ。今風にいうならPTSD(心的外傷後ストレス障害)などと解釈するのだろうか。しかし、作者はこれをどう解決しようというのだろうか。

透子は、桂の積極的な仲介による高津との「婚約」の祝宴の夜、彼への一方的な別れの手紙を出す。三年間のイラクでの発掘調査によって、結婚を待たせた婚約者が他にいるという困難を乗り越えたにもかかわらず、恋愛を不可能にしているのは、何か。

「わたくし、子供は生みませんの」／「どうして」／「不具者でも生れたら厭ですから」(十一章)

この桂との対話を引用するのは、少しためらった。とてもじゃないが、一九七〇年前後に活発な反差別運動をした被爆二世たちの存在を視野に入れるなら、その成果をふまえるなら、この「会話」は表出できない。それが残されていることも、六〇年代前半

の作品らしいといえ、そこまでの話だ。ただ、長崎での高校の級友・榎本操（「映画のお仕事」をしているとされる）は、「家は爆心地付近にあって、あの日両親を同時に喪っていた。……高等学校時代、彼女は既に娘としてのしるしを失っている筈であった。従って性格は多少女らしさを失い、男のような一面を持つようになっていた」（十四章）。ここも、「従って」以下は、今げんざい前項とつないで語るには勇気がいる。男の私にはわからない。更年期を迎え、「もう女じゃないの」などと言いながら、きわめて魅力的なエロス（女らしさ）を漂わせる女性は多い。

ところで、透子は性的に奔放に生きる操を思いながら問う。そうした榎本操と自分とはどこが違うのか。榎本操は女としての肉体を失っている。自分は肉体こそ失っていないが、謂ってみれば、その替りに精神を失っているようなものではないか。……もうこの世に、汝の求める確かなものはないのだ。汝は汝の二つの眼で、この世のいつさいのものが一瞬にして崩壊し、一瞬にして跡形もなくなったのを見た筈だ。命あるものは亡び、形あるものは消え去ったのだ。見なければよかったが、汝は見ってしまったのだ。見てしまったということは、もうどうすることもできないことだ。

この「汝」と呼びかけるものは、いったい何者か？ 自らに由りて自ら存在する「神」にしては、少し小さすぎないか。これは、作者また作中の「透子」たちが抱く、上つ面の「神」でしかない。「この世に汝の求める確かなものはない」などと、「神」ならば口が裂けてもいっちゃならないぜ。だって、「ない」を謂わないことで、反語的に「確かなもの」の存在（ある）を予見させる存

在をこそ「神」とも言うんじゃないか。すべては肯定される。すべては赦される。

それに、「いかなることにも酔わない」透子は言う。「廢墟というものは好きです。……そこに残っている物だけが確かだという気がするんです。……この柱や、この土台だけが、絶対にどんな力にも壊されない確かなものだったんだという気がいたしますわ。他のものはみんな形を消してしまいました。……信じることができるのはこの何個かの石だけだった」（四章）。果たしてそうか。石が不変の象徴でとどまれるならそれでいい。しかし、巖でさえ打ち砕くおそるべき力の存在をイエスは示したはずではないか。「身を殺して靈魂たましひをころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ」（マタイ10・28）。「石」を信じることのできる透子はまだ救われている。だから、「一人の人に愛情を持つということが淋しい」（五章）、「自分は、なべて不純なものを取り去ってしまったあとの本当のものだけがほしい」（八章）などと、甘えた言葉も吐けるのだろう。

それにしても姉弟の会話のなかによく「神」が登場する。「要するに僕たちの相手は神だと思ふんだ。人間じゃない、神だよ。僕は神に聞いて貰うために、音楽を作っている。姉さんは神に見て貰うために、自分の愛を考えたらいいんだ。普通の人たちにはそんな必要はない。併し、僕たちにはある。いつでも、神の前に僕たちは引き出されているんだ」（十章）。はあ、そうですか。まあ、青臭い音楽家の科白だから許すとしても、恐るべき選民意識。付き合っていられない。そんなに「神」って、魅力的だったの？ そうだね、原爆投下だって、祝祭に変える力を持っている！